

## 第 1 回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会

(2010 年 7 月 11 日)御中

奥村昭雄

愛知県と公立大学法人愛知県立芸術大学の両者が、現在、基本設計が完了している「新音楽学部棟」も含めての「全体計画」にたいする「検討会」を持つ、という考えに至ったことに敬意を表します。

私は、この大切な第 1 回の会合に出席できないので、責任のある立場として指名いたしました、永田昌民・近藤高史・大谷茂暢の 3 名を、奥村昭雄の代理人として、この意見書を託します。

第 1 に申し上げるのは、この会議の持ち方についてです。どなたが選定されたのかわかりませんが、構成メンバーのリストを拝見しますと、建築家のメンバーは少数であり、愛知芸大の将来の計画も見据えて設計した原設計者に属する者は私だけです。これでバランスのとれた議論が可能でしょうか。

ここに添付いたしました「提言書」は先に「県知事・県議会議長・県担当部課長・大学法人理事長・学長ならびに学内施設整備委員各位」あてに提出いたしましたもので、再びこの会に対して提出いたします。どうか検討する問題として第一に取り上げてください。提言者は下記の 31 名の方々です。(その後 4 名増えて 35 名になりました)

(アイウエオ順敬称略)

秋山信行・浅野崇・池田武邦・石田信男・井上説子・岩崎駿介・梅沢典雄・  
大谷茂暢・大橋一正・奥村昭雄・海谷寛・片岡泰子・川村純一・神田雅子・  
小玉祐一郎・小谷部育子・近藤高史・篠節子・平良敬一・高野祐之・  
道家駿太郎・戸沢真木子・永田昌民・永橋為成・野沢正光・林昭男・日高敏郎・  
櫃田伸也・藤岡洋保・細川淳・堀越英嗣・松隈洋・三沢浩・山本圭介・山本厚生

また、本日の会においては「公開」と「記録」の原則を確認してください。また、前述のごとく建築家と原設計者は少数であるという状態での多数決による決定方法を行わないことも確認して下さい。

第2に申しあげること、この検討会で検討していただきたい主な問題点です。各論は徐々に討議されると思いますが、大きな問題点として2つのことを申し上げます。

- (一) 吉村が設計したということはこの際、問題ではない。よい建物だと思っただけのものについては、なるべく、直したり増築したりして、使いつづけていただきたい。県のお金で作った県の資産ですから、直したり増築したりして使い続けることが肝要です。まだ使えるものを維持しないのが根本的におかしいのです。
- (二) 今回の日建設計の新音楽学部棟の計画位置に建物を建てることについて、再考していただきたい。理由は5つあります。
  - ①160m(ブリッジも入れると210m)もある大きな壁が東側に出来ると東の丘陵の景観が学内から感じられなくなり、キャンパス全体の拡がり感が失われ、県が当初計画した愛知芸大の財産が活かせません。愛知芸大のキャンパスは個々の建物の設計だけでなく、建物の配置がキャンパス全体についてバランスのとれたプロポーションを作っています。スケール感を大切にしてください。
  - ②あそこがふさがってしまうと、北の幹線道路から入る、将来のための増設保留地と、大学中心部を取り巻く空間との連絡が断たれてしまいます。
  - ③自然保護の立場から考えて、湧水と表層水のある傾斜地を保存しなければなりません。ここで水系を断つと、二の池方面やほかの水系のバランスが壊れ種々の動・植物が絶滅することになります。
  - ④「緊急」である、という理由をもう少しちゃんと説明してください。既存の音楽学部棟に増築したり、順々に直したりすることは、なぜ出来ないのでしょうか。
  - ⑤この計画は、動線にも混乱が見られ、たいへん窮屈な案です。この基本設計の内容であれば、改修と増築で充分対応出来、工費も減らせます。

第3に申し上げるのは、会の持ち方のスケジュールについてです。特に各界の有識者に対してのあまりのハードスケジュールは、「一方的会議」のように感じられます。余裕のあるスケジュールを組んでいただきたい。本日は以上です。

## 第2回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会

(2010年7月15日)御中

奥村 昭雄

第1回検討会に提出いたしました私の意見の中の大きな問題点は2つのことでした。一つが「直して使ってほしい」ということで、もう一つが「基本設計のあの位置に新音楽学部棟を建てることについて、再検討していただきたい」ということであります。どうか私の意見を皆さんで討議していただきたい、と希望します。

本日は第2回の検討会にあたり、さきの二つに加えて、もう一つの意見を提出します。これも検討してください。

今まで維持管理をしてこられた方々の苦心の結果について、極めて実際の報告を聞かせていただきたい。そのことによって、始めて現実的に「直して使う」道が開けてくると思います。予算の節減になることなので、県も賛成してくださるにちがひありません。具体的なデータを公開してください。工夫の方法についての相談に参加させてください。当初からの建物について、全く価値を認めてくださらない場合をのぞき、協力を惜しみません

第1回検討会での見学で指摘された、建物についてのさまざまな問題点を聞きますと、全て解決・善処すべきものと思われまふ。現時点では、設計の時とは異なる、追加する要求があると思いますが、今、必要なことは、良くないとされるものを全て洗い出すことです。そしてそれらをどのような方法で改善・解決するかを考えるとときです。今までのものが全くどうしようもなく使えない、との判断であれば、それは、それが正しいのです。しかし、本当に全く使えないのですか。改修・増築の方向を検討したのですか。見学の過程で紹介されたものには、メンテナンスまたは改善という範囲で対応可能なものが相当あったと聞いております。音楽学部棟の天井に弓がぶつかるとの指摘に対しては、天井高が高い建物を増築するということになるのでしょうか。どこもこれも機能を満たしていないとの説明であったそうですが、例えば、奏楽堂への楽器の移動は、搬入口と搬送エレベーター、屋根つき搬送路の設置で解決できませんか。問題である、と指摘されたことについての検討は順次行えばよいと思います。全部がダメだ、と言って壊してしまうのは残念です。もしも、当初の設計者に、工事についての現場監理がゆるされていたならば、また、そのような概念が確立してはいないけれど、建物が使われだしてからのメンテナンス管理という仕事が設計者に与えられていたならば、現在のような、いわゆる老朽化や機能面での不具合には至っていなかったであろう、という無念もあります。今後のことになりますが、新しい領域への大学としての取り組みが計画されるかも知れません。中期目標・中期計画には記載されていない様に思いますが、積極的な将来への展開を期待します。どのようなことにも協力を惜しみません。

もう一つ申し上げたいのはこのキャンパスの独特な美しい雰囲気をごどのように考えておられますか、です。芸術において「美」の追求は永遠のテーマです。感性を育てることが大事な使命である芸術大学にふさわしいこのキャンパスは、DOCOMOMOと建築家協会から、価値ある建築として認定され、平成18年3月に発表された「愛知県大学改革基本計画」において「県立芸術大学の校舎の改修について、厳しい財政状況を踏まえ、年次計画を作成の上、貴重な芸術的資産の価値を損なわないことに配慮し、計画的な整備を検討する」とされています。

可能であれば、ではありません。将来にむけて使いつづけ、持続することの価値を、愛知県が率先して社会に示すこと。それが可能な方法を考え出し、実現してゆくことこそ、芸術大学の使命であると思います。これからの社会は環境保護と持続性がテーマです。

さいごに付け加えます。検討会なので検討するにはどのような方法があるか。スケジュールの決め方については会に出席する方々の都合を少しは聞いてほしい。また、公開の原則を実行するのであれば、傍聴がもう少し入れるように机の配置を変えるとか、部屋を変えるとかしてほしい。急いでいても充実した討論ができる条件を、敢えて作らない、と思われぬようにしてほしい、と願います。

### 第3回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会

(2010年7月26日)御中

奥村 昭雄

第1回に提出いたしました意見は、コピーが配布されただけです。

第2回も同じ。第1回と第2回の意見の内容の概略は

- ①会議の持ち方についての提言。これは愛知芸大の場合だけでなく、税金を使って公共建築の改修などをおこなう場合の、公正な意見交換の方法についての35人の提言。
- ②建て替えないで直したり増築したりしてほしい、という原則について討議。経済的にも大きく有利。自然も守れる。
- ③今回の基本設計の建物の位置についての考え方の討議。
- ④どういう保守をしてきたか、の具体的な報告が聞きたい。

の4つです。本日は更に一つの提案と三つの質問を致します。どうか前回、前々回のものとおわせて「検討会」なのですから「検討」してください。

**提案** : 前回、法人がどういう保守をしてきたかの具体的な報告をききたい、

と申し上げたら資料があるから出すと言われ、項目リストが提示されましたが内容がわかりません。具体的な工事の内訳と工事費がわからないと意味がありません。

今回の提案。県が3年に亘って予算を計上して改修についての調査を行ったと聞いています。

法人は、全部壊したいわけではない、使えるものは使いたいと言っているのですから、ある建物を活用する道を探るのが正しいのではないのでしょうか。県が行った調査の内容と予算を公開していただきたい。今回この会議に提出された「基本設計」による「新築」と、県がおこなった「改修」の調査との間にある問題点が明らかになり、なぜ改修では対応が不可能であるのか、なぜ改修ならば半分ほどの金額で出来るのに、二倍の予算を使わなければ出来ないのか、ということが説明出来るでしょう。それではじめて、比較して「検討」することが出来、客観的な判断が可能となります。県は、この会議に対してオブザーバーである、と言う立場を表明されていますが、資料を提供することに反対はなさらないでしょう。

質問その①：県のオブザーバー（委員の一員）に質問。県の「緊急整備対応指針」によって新音楽学部棟の新築を進めることになった、のですか。法人がマスタープランから切り離して行うと言うので、県が予算計上を同意されたのですか。

質問その②：法人に質問。2009年8月21日付けの愛知芸大の建物に関する現状の報告書を拝見する機会がありましたが、6人の先生方に対するヒアリングが各々の方の意見としては出ていません。ヒアリングによって「全面建て替え計画」と言う結論になったのでしょうか。ヒアリング議事録を参考のために公開してください。客観的なご意見であったと思われますので、この検討会の資料に加えてください。

質問その③：法人と県に質問。女子寮は、県の福利厚生施設にはあたらない、耐震調査では渡り廊下以外はランクAである、ということがわかりました。県は法人が「直す」といえば直すが、「使うつもりは無い」というので補修の予算をつけなかった。次に法人は「新しい女子寮を確保したので古い女子寮はいらない」と言った。それでいらないなら壊すとなった、ということですか。壊さなければならない理由はないが、いらないから壊すということですね。でも使えるものならば使うということで検討することが正しいのではないですか。

建物のことだけでなく、愛知芸大の将来に関わる大切に貴重な検討会でありますから、「参考人に聞く」時間や、「資料を検討する」時間も必要です。場合によっては「特別研究班」を作って会議とは別の時間に研究して報告を出すという方法もあります。せつかくこのような場を設けて「検討」をしようというのは、基本設計図がはじめて会議に提出されたその日に、「では、これで基本設計は了承された、ということでよろしいでしょうか」は、誰がきいてもおかしいです。もっと落ち着いてやってください。 以上

追記：17日に行われた大学主催の見学会に参加した人に聞きました。はじめから、案内をしてくださった先生の説明の内容は「雨が洩る」「カビが生える」「楽器を運ぶのに屋根がないので雨に濡れる」「外の音が聞こえる」「中の音が漏れる」「足元が危険」「排水が詰まっている」ということであつたそうです。いかに保守がなされていないか、という説明をしているようです。大学には営繕課というのはないのですか。先生や学生さん達が困っている所を直してください。

## 第 4 回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会

(2010 年 8 月 6 日)御中

20100805 奥村 昭雄

第 1 回、第 2 回、第 3 回、と私の意見は配布されるだけで「検討」していただいております。ここに重ねて 4 回目の意見を提出いたします。どうか「検討」してください。

- ◎ 壊さないで、直したり増築したりして、元の建物を使ってほしい。
- ◎ 保守の具体的な記録を見せてほしい。
- ◎ 県が調査した「改修」「改修と増築」「改築」の資料を見せてほしい。
- ◎ 全体計画を考えない状態での、部分の工事計画をしないでほしい。

という 4 つの問題点を、この検討会で検討して前向きに解決したいと思いますが、現実的に「困っていること」を同時並行的に直して行くのも大切なことです。検討課題は検討しながら、それとは別に、検討委員会の中に部会を作って、具体的な「改修」の実行方法を検討してはどうでしょうか。毎日の不便を直すことをしないのは、先生と学生さんたちに申し訳ないと思います。また、それをやってみることが、検討課題の解決にも役立つに違いないと思います。早速やってみるべきものは次の 3 つです。

- ① 音楽学部の練習室とレッスン室の防音改修
- ② 同上の耐震および耐暑・耐寒対策
- ③ どこか 1 ケ所のモデルトイレ改修

実際にやってみるということは、実際の役にたつと思います。そのくらいの予算は県も捻出してくださると思います。これらの工事は、のちのち決して無駄にはなりません。創意工夫という言葉を、実際に運用してみようではありませんか。これが実行されれば、次々と別の問題にもとりかかることが出来ます。

この検討会も、もしかすると夏休みに入るかもしれないので、この際もう二つの意見を申し述べます。

- ① 前回、金田公立大学法人理事兼事務局長が、「治助トンネルは、第 1 期の工事中に破損して水が止まった」と証言されましたが、1985 年の増築工事計画の時の書類に添付された図面にもその存在が記入されていますし、実際に水が長鶴池に向かって流れているのを目撃している人も多くおられます。まだ、いまなら復旧して、再び長鶴池に水が満たされることが可能ではないでしょうか。調査してください。
- ② 女子寮ですが、自分で言うのもなんなのですが、あれはなかなか良く出来た設計だと思っています。2 人部屋がだめなら 1 人部屋にしてもいい。食堂と台所のない女子寮は教育上もなさげない。他の用途ということもあり得る。どうか利用しつづけていただきたい。

以上

## 第 5 回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会 御中

(2010 年 9 月 3 日午後 3 時半より)

8 月 19 日 奥村 昭雄

### (一)全体計画は、ある

1~4 回の検討会で「マスタープランはない…法人」「マスタープランは認知していない…県」という説明がありましたが、法人主導で県も承認している「全体計画」というものが存在することがわかりました。はじめに、「マスタープラン」「ゾーニング計画」「構想」「ビジョン」「基本計画」「全体計画」というまぎらわしい言葉使いをすべて統一して、今後は「全体計画」と呼ぶことに同意してください。

ここに、平成 21 年(2009)2 月に出来た「立地調査報告書」というもの(第 4 回検討会で配られた参考資料:芸大整備に関する各種調査・計画について、というリストの下から 2 番目)があります。立地調査報告書を作るにあたっての前提となった資料は次の二つです。

- 1.平成 20 年(2008)3 月 11 日に、法人から県に提出された「芸術大学マスタープラン」(構想と名付けられた配置図が 3 枚ありますので、添付します。)
- 2.平成 20 年(2008)3 月 31 日に県から出された「緊急整備対応指針」  
そして、今回の「新音楽学部棟」は、これが「基本設計」「実施設計」「工事」、と進んでゆけば必然的にこの 3 枚の「全体計画」の方向に進まざるを得ない順序です。

- I.新音楽学部棟を建てる
- II.現音楽学部棟を壊して、新講義棟と新学生会館を建てる
- III.現講義棟に管理部門が引っ越して、現管理棟を壊す
- IV.管理棟跡地に新コンサートホールを建てる
- V.奏楽堂を…

となるのです。だからこの「マスタープランまたは構想」は実際には、法人と県による「全体計画」なのです。

### (二)対案を示す

(一)で述べたように、大学側の「全体計画」がありました。それに対する「全体計画の対案」を提出します。それは、今ある愛知芸大のキャンパスそのものです。対案は実物です。改修を主とし、最小限の増築もする、という考えです。税金の使い方としても、全改築の 1/3~1/2 で済みます。1964 年に開始した設計により 1966 年に開校した愛知芸大はその後、学生数の増加と新しい科目の増設に従い 1985 年から 1991 年にかけて、かなり大きな増改築をおこないました。また、県は少ない予算の中で、部分的な改修をやってこられました。(改修の苦労を書いちゃった、雑誌 C&D の中の 2 頁を参考に添付します)。2005 年には現況の調査、2006 年には「改修」を主とした計

画も、県は、しっかりと立てています。

対案の主旨は空間のバランスにあります。講義棟の軽やかな姿は、管理棟の姿(柱や2~3階のプロポーション)に支えられており、講義棟と管理棟の間の空間の軽さも、二つの建物の比率によっています。奏楽堂と音楽学部棟と美術学部との間の渡り廊下の寸法は、樹木と建物のスケールを感じ取れるゲージとなっています。そういう感覚が全体のバランスを作り出しています。見れば解っていただけます。

「40年間、希望し続けてきた改修がなされないまま今日に至っているのを、今回やっと希望が叶うチャンスが来たのです。」という、ある委員の言葉は迫真力があり、本当にそうだと思います。今回やっとやろうとしていることに声援を送ります。だが、しかし、46年前におこなった設計を、糞味噌にやつつけるのはやめてほしい。もしその時、あなたが設計していたならばもっといい設計をしたらどう、と言いたい気持ちはわかりますが、どうしたら愛知芸大の建物をもっと良くする事が出来るか、ということについて協力して取り組もうではありませんか。他の委員の方々にも同様のことを申し上げたい。互いに尊重し合い、そこで始めて一方的でない、意見の交換というものが成立します。

部分について言及するならば次のようになります。

- ①音楽学部には増築が必要か？これについては、日建設計が大学側の要望を踏まえて行った計画学的データを尊重します。ただし現在世の中で芸術系大学の入学希望者数がどのように変遷しているか、についての考察が不足していると思います。構内に建物をどんどん建てて、学生数を増やそうとしたのに、応募学生数は定員を割り、メンテナンスの費用は嵩み、赤字になって苦しんでいる学校がいくつもあります。
- ② ①の考察ののちに、学生数・練習室数・レッスン室数・教員室数を再検討します。
- ③ 音楽学部棟は全く使い物にならないか？現音楽学部にある「合奏室」は音響的な性能が評価され、日建設計がモデル的に音響調査を行ったと聞いています。85年以後に建てた管打レッスン棟や合奏棟のあるところは、予算的に少し恵まれてきたときに建てたので、全部ダメ、の中には入らないと思います。そうすると、全く使い物にならない範囲は限られてきます。それを仮に「ダメ棟」と呼びましょう。
- ④ ダメ棟の改修の仕方。遮音床・遮音壁(詳細図的には少し考える余地がありますがそれは別として)、を実施したとすると耐震基準に合わない、という決定的なダメージがあります。ところがここに名案あり。最上階を減築するのです。練習室がなくなりますが、下の2階分のレッスン室は広いので、天井高の問題(後述)を除けば、十分な練習室になります。耐震もO・Kとなり、屋根は置き屋根としてスラブとの間に通気をとれば夏涼しい。屋根を新しく架けるなら太陽光発電をやろう、という夢も実現可能。
- ⑤ そして不足分を増築すれば良いのです。天井高さ2,200ではボウイングのときにぶつかってしまう、と言いますがボウイングの練習は大きい部屋でやって、普段の練習は天井が低くても出来る、と専門家が言っています。断面の決め方で高さがとれる方法もあります。増築する場所は、現在の音楽学部棟の東南、体育館との間、をお勧

めします。あそこなら小さな水系を二つほど注意して保存すれば済みます。

- ⑥ 3枚の「構想」という図によると、奏楽堂を壊してしまうように見えますが、転用の効く建物ではありません。あれはなんとかして使いたい、と美術学部長もおっしゃっております。増築を現音楽学部の東南にすれば、奏楽堂も生き返ります。奏楽堂の音響などについては後述します。
- ⑦ 改修工事中の騒音、という問題があります。たしかに騒音は出るでしょう。工程の組み方、工事区分の決め方、大きな音がどうしても出る工事種目は夏休み・冬休みに行く、などの工夫をして、それでもうまくゆかない分は我慢していただきたい。1年生に入学した時から「防音ドア」や「防音サッシュ」などの改修を希望し続けた学生さんが、もう4年生になってしまったのに4年間、何もやってもらえなかった、と言っていた、という話を聞きました。半年ほど我慢していただければ直せるものと思います。現に85年からの増築の時には可能でした。不可能ではありません。
- ⑧ 奏楽堂の音響設計については、丁度、愛知芸大設計の前に出来た、ロンドンのロイヤルフェスティバルホールが貴重なお手本でありました。それまでの考え方と大きく違ったのは「低音吸収」ということと「舞台にいる演奏者に対する反射音の考え方」でした。東大の石井先生の指導のもとで設計し、出来上がってからの音響測定の結果も良好でした。根本的に、座席数にたいする室内のボリュームが不足であるという説には同意できません。また、残響時間がもつと長いほうがいい、という意見についても、レイモンドさん設計の群馬のホールより愛知芸大のほうが残響時間が少し長い、また、群馬よりも短いほうが良いという説もあるのです。演奏者の好みということは勿論ありますが、多くの演奏者に高い評価を得ている愛知芸大の奏楽堂を、良くないと決めつけないで、実測などの研究をしてほしい、と思います。
- ⑨ 楽器搬入路については、奏楽堂の南側に大きいドアを作ることも可能ですし、雨の日濡れないで運べる通路を作ることも可能です。楽器のことだけでは無く、バリアフリー対策(エレベーター設置など)と、耐震と、アスベスト、については、県が提唱している通りにやるのが正解であると思います。
- ⑩ 美術学部については、デザイン棟のトップライトは直したい。直すついでにOMの集熱屋根に改造して、冬暖かく、夏涼しく、湿気のない棟にしてはどうでしょう。デザイン棟の増築が必要であれば(最初に述べた入学希望者数の変遷の研究を踏まえて)基礎デザイン棟部分を改造して中層化するということもあり得ます。アトリエ棟の屋根は幸いにみんな南傾斜ですから、屋根を2重にして通気をとれば夏涼しくなり、上屋根では太陽光発電が相当量できます。太陽熱暖房と、お湯取りも可能です。ここで詳しく方法等について述べませんが、新しい地球保護環境デザインの提案になります。
- ⑪ 駐車場と汚水処理の2つは、これから考えなければならない重要な課題です。現在ある5ヶ所の駐車場が最もよい位置であるとは言えません。奏楽堂で演奏中にクラクションが聞こえない位置、各学部で使いやすい位置、景観との関係が検討課題です。

汚水処理はもっと合併浄化槽の数を増やして、きれいになった水を現在ある排水管道で流したい。こういう細かいことはまだほかにもあります。

- ⑫ 全体にボリュームを適正にして、改修を主とし、最小限の増築もするという考えは、2005年2006年に、県が改修を主として考えた案(大学事務局が資料を送ってくださったので、内容を知ることが出来ました。第4回のときに積み上げてあった資料で、他の委員の方はご覧にならなかったかもしれませんが)に近いものです。

このような方向で実行すれば、日建設計がおこなった計画学的な研究は生かされ、無駄にはならないし、優れた改修の技術を示すことは、世界的にも評価され、愛知芸大の名前も顕彰されるでしょう。

- ⑬ さいごに、外人公舎・女子寮・教職員住宅は、残してください、と言います。いろいろな用途が考えられるでしょう。(寮は県のいうところの福利厚生施設でもないし、耐震基準もクリアしています。寮として使えれば最高です。)先生が住んでいる教職員住宅は教育上必要な施設です。卒業生からも、とても良かったという話をたくさん聞いております。職員の福利厚生施設は持たない、とする県の方針は、行政としては正しいのですが、愛知芸大における芸術教育とは相容れないのではないのでしょうか。
- ⑭ もうひとつ最後に、水系の復活による「水と緑のキャンパス」の甦りを希望します。公園のようなキャンパスになります。(簡単な全体計画の配置図も1枚添付しました。)

### (三) 将来の愛知芸大にむけて

このような「対案の提示」を行う前に、どうしても言っておきたいことがあります。この検討会が、いままで4回にわたってやってきたことは、全体計画(ビジョン)の検討ではありません。「新音楽学部棟の新築についての説明会」であって、全体計画なくして個別建物計画があり得ないことの否定です。ここに対案を提示したのは、日建設計の案でなくてはならないのではないのと同様に、この案でなくてはならないものとしての提示、ではありません。愛知芸大の中にも、別の案を持っておられる方もあります。検討会が、広く国際コンペを主催するとしたら、もっとユニークな案が出てくるでしょう。アイデアコンペです。日本の愛知芸大ではなく世界の愛知芸大としての認知を促すことが出来ます。とにかく、ここまでの検討会は恣意的であると言われても仕方が無い構成で発足し、一方的であるという社会的な評価を受けるでしょう。ここで、開かれた検討会であるということを示す方法として公開コンペを提案します。審査は、この検討会もしくは、権威ある日本建築学会にお願いするのも一つの方法です。重ねて強調します。愛知芸大の国際化を推進する道は現在の建物を、最新の技術力をもって再生することです。 以上

## 第 5 回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会 御中（その二）

（2010 年 9 月 3 日午後 3 時半より）

9 月 2 日 奥村 昭雄

先に 8 月 20 日までに提出せよ、との検討会事務局よりの要請により、第 5 回検討会あてに作成いたしました意見を提出いたしました。その後、竹内事務局長より送っていただいた 5 種類の資料《カッコ内がそれです》を拝見し再び申し上げたいことが発生いたしましたので申し上げます。

それは、県が「改修」を主とした計画を立てていたのに、全面建て替えの方向がどのようにして生まれたか、についての考察です。

- ① 私が愛知芸大の建て替え問題を聞いたのは 2008 年の秋でした。どうやって意見を申し上げたらよいかと考えている時に、ある友人が「手紙を書きなさい」と薦めてくださったので、12 月末に 10 人の方に手紙を出しました。それは「建て替えることを考える前に、直すことを考えてほしい」という意味のもので、あて先は、知事・法人理事長・学長・美術学部長・県民生活部学事振興課・あとの 5 人は東京芸大建築科卒の日建設計社員でした。どこからも反応が無い、とっていたところ
- ② 2009 年 1 月 9 日に長谷美術学部長が我が家にお見えになりました(1 回目の来訪)。そして、「たしかに案はあるが、280 億の予算を確保したいという目的で作ったものであって、現実にはまだなにも始まっていません」というお話しでした。2009 年の 1 月です。
- ③ 第 2 回の来訪は 2009 年の 8 月 21 日で、日建設計の富樫さんと若林さんを伴われ、「県が緊急な対策として、音楽学部棟だけの基本設計を日建設計に発注しました。」というお話しでした。マスタープランの説明も若林さんから聞きました。
- ④ 3 回目の来訪は 2010 年 5 月 31 日で、音楽学部棟の実施設設計料が県の議会で了承された、ということと、検討会をはじめたいが参加してもらえますか、というお話しでした。
- ⑤ 一方、今回いただいた資料によって、県と法人がこの問題について、どのようなスケジュールで、ことを運んでこられたかということが、見えてきました。

◎2005 年：県の《改修基本調査》。愛知芸大の校舎老朽化対策として「改修」を目的とした調査が行われました。学校側の要望をきいたものではなく、設備系を除き建築のみのものではありませんが、大変詳細を極めたもので、現在でも大いに参考になる調査です。現況調査と早期保全改修(約 14 億)・長期保全改修(約 70 億)と内訳が入っています。

◎2006 年：県の《改修基本計画》。前年の調査の結果、改修だけでは解決しない問題、即ち設備系の問題、と、要望を聞いての考え、を加味するならば「改修+増築」及び「全面改築」も検討する必要があるということで、調査の続きと計画が行われました。

改修(約 90 億)と改修+増築(約 140 億)と全改築(約 160 億)と概算見積り

考察 CASE1.すべて改修(景観保持可能・工事費少・短期間)

CASE2.建物ごとに修繕・改修・改築＝増築(文化的価値△)

CASE3.全改築(高額・将来的維持保全に問題・景観保持可能性なし)

◎2006 年 3 月には、愛知県大学改革基本計画が県から出ました。

これは「大学改革＝法人化」にあたり、目標を見定めたい、と思って県が作ったものです。改築問題に直接関係のある部分は、第3章 1-2-3-(3)のイで

施設整備費 県は法人に出資財産の適正な管理保全をおこなわせるため

これに必要な財源措置を講ずる。なお、県は、老朽化した愛知芸大校舎の改修について、きびしい財政状態を踏まえ、年次計画を作成の上、貴重な芸術的資産の価値を損なわないことに配慮し計画的な整備を検討する。です。

もう一つの重要なところは、第3章 1-1で

法人化の意義 大学全入時代の到来・地方財政の健全化・個性を輝かせるための活性化・地域社会との連携を強化・法人による自己決定と自己責任を民間の経営的手法を活用しながら自主、自立的な大学運営が可能となる体制を整備する。とあります。

◎2006年7月28日：県と大学が打ち合わせ。前述の《改修基本計画》の中に記録があります。打ち合わせは、2006年の6月28日から7月28日まで4回あり、その後検討会が9月10月11月にも予定されています。中でも7月28日は第6回検討会として、愛知芸大において行われ、大学の施設整備委員会から9名と参考人3名・事務局3名。県の側からは11名が参加しています。ここで改築という考えが現れました。幾つかの発言を紹介します。疑問のある方は公開されている資料を読んでいただくことが出来ます。

☆工事概要 早期保全14億 長期保全70億(竣工当時の状態に復帰)

☆工程表にはデザイン検討が入っていない。

☆仕様書には吉村さんの考えを……が入っていないが。

☆「損なわないことに配慮」という中に入っている。

☆「損なう」「損なわない」は主観的なので県⇄大学で相談する。

☆改修の中で原設計に関わりのある人を入れるか。

☆費用がかからなければ……

この前と後の間の一年で改修を主とする考えが改築を主とする考えになった。

◎2007年9月26日～2008年3月17日：後述の基本計画策定支援報告書の資料編

◎2007年10月16日：学内で美術学部教員展にマスタープランを展示。

◎2008年3月11日：大学が県にマスタープランを提出(このもの自体の資料は無い)

◎2008年3月17日～2008年12月17日：《芸術大学整備基本計画策定支援報告書》

前述の資料編は検討資料であって、大学が県に出したマスタープランのもとになっています。資料編は2007年9月のもので6ツに分かれています。

1.コンセプト＝オンリーワンの大学力

2.ゾーニングコンセプト

3.面積プログラム(東京芸大と同じにする)

#### 4.全体スケジュール

5.既設建物改修検討・用途変更検討など

6.改築工事費概算(ゾーニング計画第2期)総工費約280億

◎2008年3月31日:県が緊急対応指針を出す。

◎2008年:9月17日～10月10日の間に県と法人は6人の有識者にヒアリングを行いました。2009年3月に出た後述《建物の現状の報告書》に「ヒアリングの概要」が含まれております。実際は6人とも「全面建て替えではなく、順次改修がよい」と述べておられますが、纏めとしては「改築やむなし」という方向です。この資料そのものに「校舎の建て替えを今後検討することになるという前提に基づいてヒアリングを行う」と書いてあるので、それに沿った意見のみをとり上げたものと思われま

◎2009年2月:県が《県立芸術大学施設整備立地調査報告書》を作りました。内容は、マスタープラン(2008年3月11日に大学が県に出したもの) および緊急整備対応指針(同年3月31日に県が出したもの)の二つに基づき

改築予定施設とされた「音楽学部棟3～4F 5898㎡。撤去は合奏棟と新音楽棟を除くすべての既存音楽学部」と「学生会館・講義棟2F 2895㎡。撤去は学生会館」の建設位置・工事工程(平成20年～24年の5年間)・造成計画の検討を行ったもので、面積一覧表では、コンサートホール・美術館(芸術資料館の呼び名を変える?)・芸術情報センター(図書館の呼び名を変える?)・音楽学部(管打レッスン棟は研究室にする・レッスン棟は講義室・作曲・ゼミ・演習室に転用)などにも言及しています。

音楽学部棟(基本設計が出来たもの)と講義棟・学生会館(これからやろうとしている)の二つの建物の立地案が3つあります。(Plan01.02.03. 4頁目に図を添付)

Plan1.構内道路にお金がかかる・造成も大変 △

Plan2.マスタープランから離れている X

Plan3.造成少 ○(今の案の位置)

(全改築についても県が考えた3つの案が添付されていましたが省略します)

◎2009年3月《芸術大学における文化的建築物保存・活用手法、給排水・エネルギー手法検討支援報告書(建築本編及び資料編)(給排水……本編及び資料編)》

2009年8月21日付で法人から出されている報告書概要版と同じ。

◎2009年8月:県は音楽学部棟の基本設計を日建設計に発注

◎2010年3月:基本設計が出来る

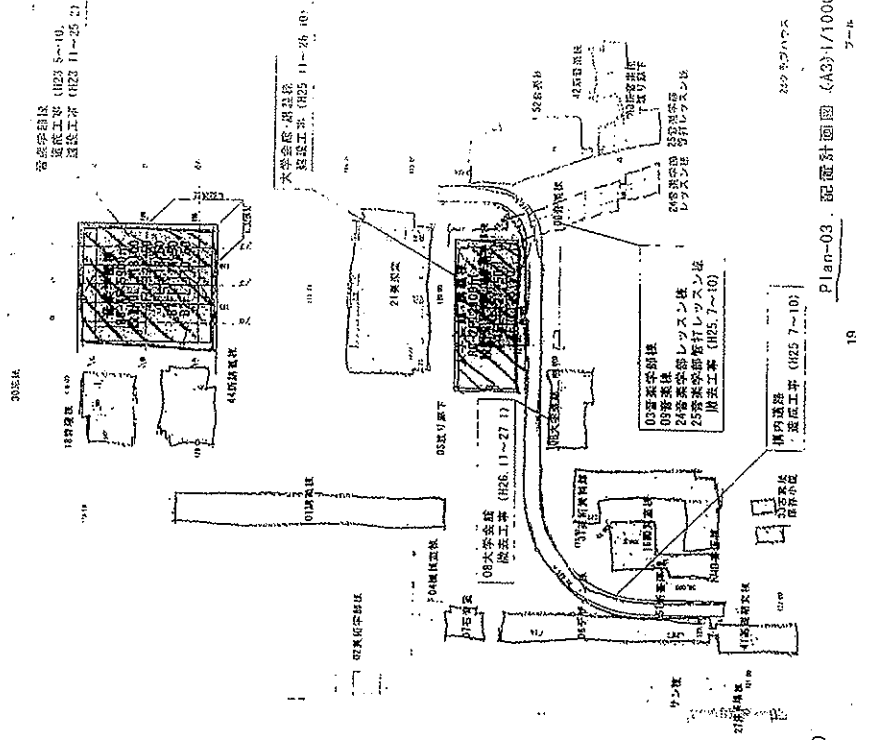
◎2010年3月:音楽学部棟の実施設設計料および外人公舎と女子寮の取壊し費用の予算が県議会で承認される。

⑥計画はこのようにして進んで来ました。1991年まで、いろいろな相談に参加していた私達は完全に蚊帳の外。県の改修+増築(140億)がどうして全改築(280億)に変身したのか大いに疑問です。よくわかる説明をしてください。 以上

3 頁にある Plan1.  
Plan2.  
Plan3.

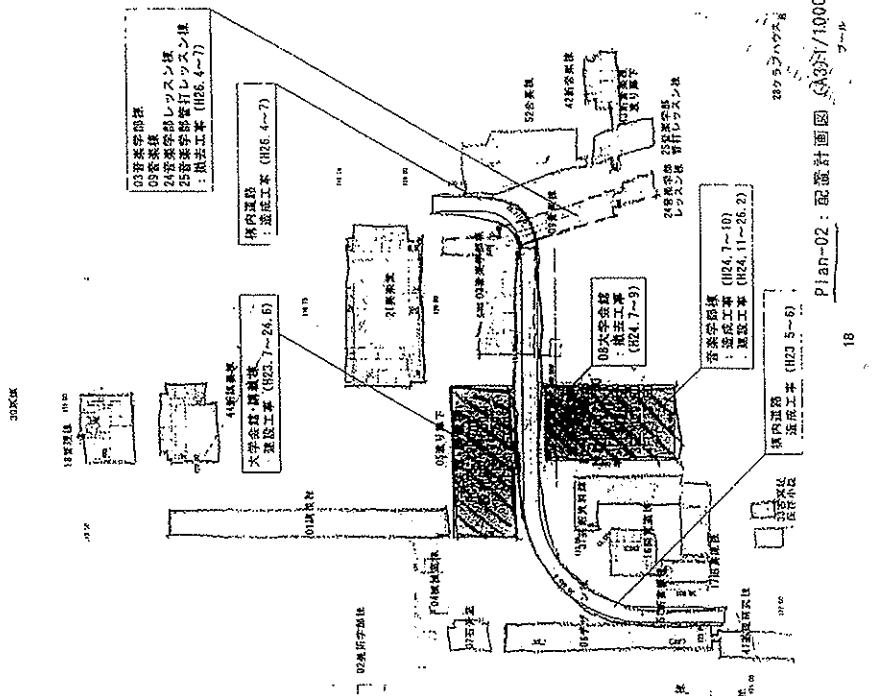
の図です。小さくて  
見にくいですが感じ  
はわかると思います

40番校舎  
型図例等参照



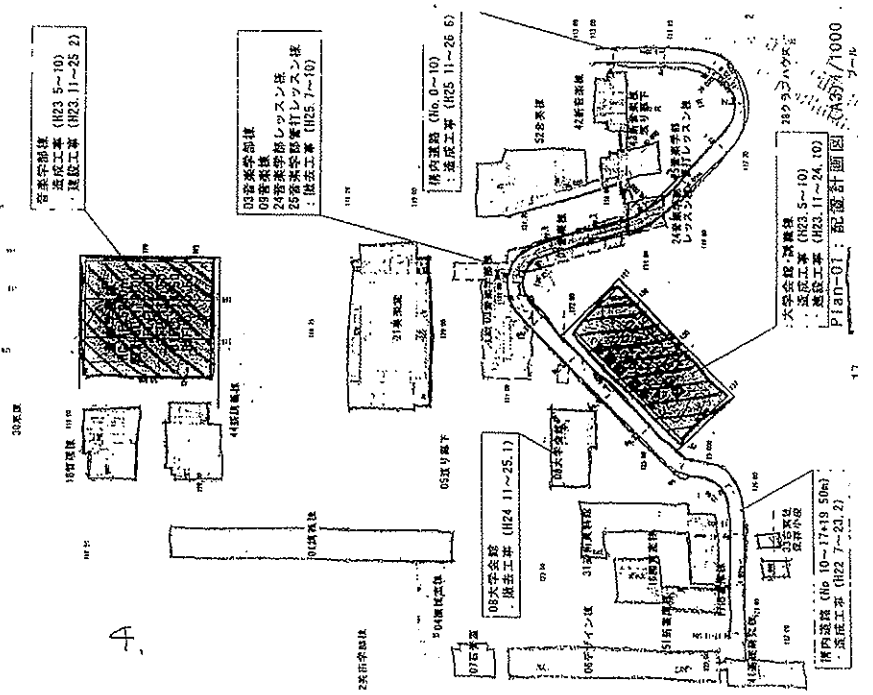
Plan-03 配電計画図 (A3) 1/1000

40番校舎  
型図例等参照



Plan-02 配電計画図 (A3) 1/1000

40番校舎  
型図例等参照



Plan-01 配電計画図 (A3) 1/1000

## 愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会事務局御中

検討会の部会について

20100920

奥村昭雄

前回、会議開催の前に「対案」の提出を希望され、提出いたしましたところ、事前に各委員にお渡しくださったので、今回も10月1日に開かれる「第1回の部会に対して」予め要望を提出します。

第3回検討会に提出した私の意見の中で申し上げたように、部会では

1. 参考人に聞く
2. 資料を検討する

をやりたいと要望します。本会議では細かい検討をする時間がないので、よく解らないまゝで話が進んでいる部分があります。よく解りたいということで、よく解っている人＝参考人、に説明してもらいながら考えたいのです。説明してもらいたいことは、第1回～5回に提出した意見の中に書いていますので順々にお願いします(あとにメモを付けました)。参考人は委員の指名によって、誰にでもなってもらえるように公平にしてください。

また、第4回検討会に提出した意見では、現実に困っていることを、同時並行的に直して行くための具体的な改修の実行方法の検討を要望しました。これも部会の仕事です。早速やってみるべきこととして

1. レッスン室・練習室の遮音と防音の改修(あとに東京芸大の例などとの比較のメモを付けました)
2. 同上の耐震・耐暑・耐寒
3. モデルトイレの改修

を提案しています。実際にやってみることで多くの収穫が得られると思うし、意見が異なる問題についての客観的な解答が得られるでしょう。

愛知芸大の施設を整備したいと思っている仲間なので、共通の目的に対して、客観性の有る、より有効な方法をとることに異議はないと思います。これに要する予算措置については県にお願いします。

というわけで初めて行われる「部会」は、その運営のやり方と、とりあげるべき内容、討議の優先順位などを、最初に話し合うべきであります。検討会本会議と同じ日にやる、というのは賛成できません。ある日、始めて出てきた図面に対して「了承してくださったとしていいですか」と言われたのと同じような、拙速で形式的な部会になることを恐れます。部会は納得できるような勉強の会でありたいと思うし、本会議に対して実のある報告が出来るようにしたいと思うからです。

また、部会についてではありませんが、次回第 6 回のビジョン検討会は、傍聴人にたいする人数制限の無い、公開の検討会とされることを提案します。

さいごに、もう一点、これも部会の問題とは関係ありませんが、検討会事務局が第 5 回の会議録の最後を「ではご了解いただいたとする」とまとめられた第 5 回ビジョン検討会そのもの(議事録受取 9 月 10 日・9 月 9 日付)に関して、別紙の文章を知事・県民生活部長・学事振興課長ならびに法人理事長に提出しましたので写しを検討会事務局にも提出いたします。

もう一つ。東京目白の吉村順三記念ギャラリーにおいて開催されている「小さな建築展」の第 22 回目《御蔵山の家》(2010 年 6 月 26 日～8.月 1 日)のチラシを参考に同封しました。この家の設計は、愛知芸大の教職員住宅の設計にも関係のある考え方です。打ち放しコンクリートの素朴な感覚や、厚合板 1 枚で作る間仕切りなど、このスタディは住宅の設計史上注目すべきものであると思います。

以上

## メモ第 1 回～第 5 回までの検討会に提出している「解りたいこと」

- 第 1 回 自然保護の識者に愛知芸大構内の水系についてうかがいたい。  
将来の全体計画を考えた場合の基本的な動線計画と敷地境界の確認
- 第 2 回 1966 年以來の維持管理体制と保守の実績  
良くないとされるものの洗い出し(耐震・アスベスト・バリアフリーを含む)。  
緊急な改修の必要に対する実際の工事方法  
環境保護についての努力目標  
県はどのような理由で改修から改築に(140 億から 280 億に)方針をかえたのか。その経緯と論理。  
女子寮を「いらない」から壊すという前に転用の要望があった。どうなったか。
- 第 4 回 困っていることを、試しに直してみることは出来ないか。  
治助トンネルの調査
- 第 5 回 レッスン室・練習室の遮音その他の改修方法の比較検討。  
奏楽堂の防音についての技術的な可能性  
駐車場についての位置と規模と全体の動線計画  
排水計画の再検討  
各建物の手の入れ方の決め方。それぞれについての理由。

## 東京芸大の例など、との比較のメモ

既存建物をどうしても建て替えずにはならない理由がだんだん絞られてきました。

音楽学部の「渡り廊下」「搬入口」は改良の余地があり、「防音」「遮音」についてもドアや窓の取り替えと、壁とスラブの増し打ちで改良する方法があることも解ってきました。レッスン室と練習室は耐震診断もクリアしているということです。奏楽堂の座席数と容積の関係、残響時間の事も許容範囲であるのが解り、安心しました。

残る問題はレッスン室と練習室についてだけです。そこに集中して考えてみます。

最初に、天井高さが低いのでボウイングのときにぶつかる、という話が大きく取り上げられていましたが、これは素人に解り易いための一つの例である、との説明を受けましたので問題から除きます。もっと客観的に考えたいと思います。

- ① 面積が足りない。練習室は最低 9 m<sup>2</sup>ほしいということですが現在の練習室は 8.55 m<sup>2</sup>しかありません。それでも東京芸大の 8.4 m<sup>2</sup>よりちょっとは大きい。レッスン室は 3 倍なので 25.66 m<sup>2</sup>です。レッスン室を半分にして練習室にしたら 12.83 m<sup>2</sup>になりますがどうでしょう。

東京芸大の場合、1号館レッスン室は  $6.8 \times 4 = 27.2$  m<sup>2</sup>

同上 3階邦楽練習室は  $2.0 \times 4 = 8$  m<sup>2</sup>

3号館レッスン室は  $4.8 \times 4.2 = 20.16$  m<sup>2</sup>

同上練習室は  $4 \times 2.1 = 8.4$  m<sup>2</sup> (53室あります)

練習ホール館 5階アンサンブル練習室は  $6.425 \times 6.3 = 40.5$  m<sup>2</sup>

この部屋の改修後の天井高さは 2.795m

同上 1階～5階練習室は  $4.125 \times 4.2 = 17.325$  m<sup>2</sup> (30室)

天井高さ 1階は 2.8m、2～5階は 2.4m

愛知芸大の場合、練習室  $2.16 \times 4.32 + 3.6/2 = 8.55$  m<sup>2</sup>

レッスン室  $8.55 \times 3 = 25.66$  m<sup>2</sup>

天井高さは低いところで 2.49m 高いところで 2.7m 平均 2.595m

県の改修案によると床を 30→115 にしているの

天井高さ、低いところ 2.345m 高いところ 2.555m 平均 2.45m

日建設計の改修案では、床は 30 のままですからスラブと合計 150 です。吊り天井の分を 350 とすると天井高さ 2.56m になります。ギザギザにして 210 としたとして低いところで 2.35m 高いところで 2.56m 平均 2.455m。

- ② 天井が低い。F～Fが 3.06m ですが、床に 90 増し打ちしたとしても天井の 350 を 270 にすれば 2.55m となり、ギザギザ 210 でも平均 2.445m です。

2.2m しかとれないというのは計算違いです。

東京芸大の場合上記のように練習室の天井高さは 2.400 です。

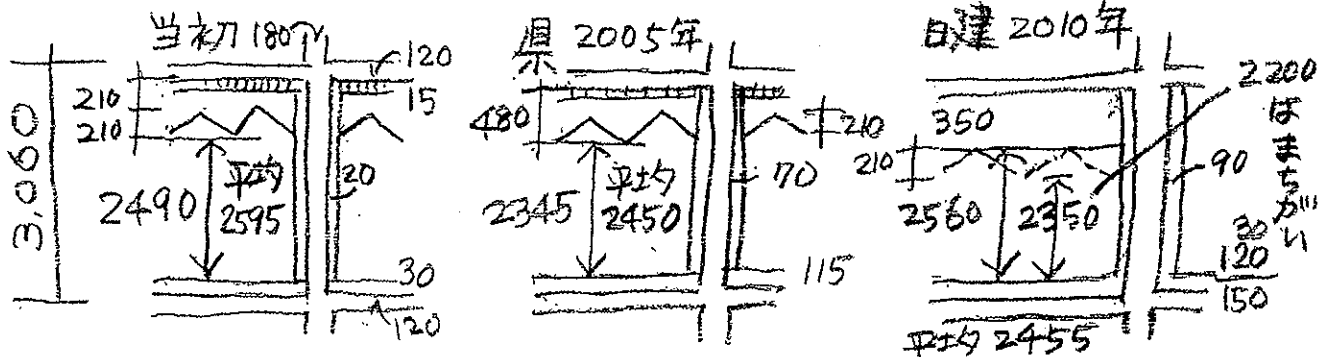
4号館3階の室内楽教員室(4-309)  $4.2 \times 11.1 = 46.62\text{m}^2$

同上合奏室(4-307)  $4.2 \times 8.4 = 35.28\text{m}^2$

同上合奏室 (4-308)  $8.4 \times 11.6 = 97.44\text{m}^2$

以上3室の天井高さは既存2.700を改修して2.3~2.5平均2.4mであります。  
愛知芸大のレッスン室と練習室の天井高さについて

「当初の案」「県の改修案」「日建設計の案」を実際の図で比べて見ました。



今はどこの音大もきれいな新しい練習室を持っているのに愛知芸大ばかりが旧態依然とした古い校舎で、これでは生徒が集まらない、と思っているということが本当の理由でありましょう。天井が低いから、ではないと思います。

- ③ 遮音は床と壁のコンクリートを増し打ち出来ませんか。やり方はいろいろあると思います。耐震が大丈夫ならばOK。面積はレッスン室で  $1.4\text{m}^2$  減ります。練習室の1つおきの隔壁は当初やったような木造または県の改修案によることも可能です。
- ④ 音が洩れる。ソルフェージュの試験のときに音が漏れるとほかの人に問題が解ってしまうということですが殆ど洩れないように出来ると思います。ドアと窓の問題です。  
ちなみに前述の東京芸大4号館3階の合奏室の改修の仕様をみますと  
床はフローリングブロック張り→複合フローリング浮き床に  
壁は有孔合板張り→GW化粧吸音板張り浮き壁に  
天井は合板格天井→ケイカル板張り・ロックウール吸音板張り・防振吊りに  
アルミサッシュ→アルミ防音窓に  
アルミドア→鋼製防音扉に  
改修しています。ほかにも材料と工法についてはいろんなやり方があります。
- ⑤ 改修が不可能という問題はありません。汚いから綺麗にしたいということでしょう。床の材料や色、壁や天井の材料や色、工夫次第できれいになると思います。
- ⑥ 奏楽堂もガラスをやめて壁にしなくても、種々の方法で飛行機の音も防ぐことが出来ます。

以上

愛知県知事 神田 真秋 様

愛知県県民生活部 部長 大久保 裕司 様

愛知県県民生活部学事振興課 課長 長谷川 好喜 様

愛知県公立大学法人 理事長 清水 哲太 様

私は、愛知県の県民生活部よりの要請によって愛知県公立大学法人が開催している、愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会委員に大学法人から指名されて参加している奥村昭雄です。

愛知県立芸術大学の「新音楽学部棟」の新築に関する実施設計の開始、および、同大学内の外人公舎と女子寮の取り壊しについて、私は了承しておりません。9月3日に行われた第5回検討会の録音をきいて疑問を感じましたので、了承していないことの確認のためにこの文書を差し上げます。

この検討会は大きなテーマとして、愛知芸大のキャンパスを、全体計画を考えた上で「改修+増築によって整備するか」または「全面改築(新築)するか」というビジョンを検討するために生まれたものであると理解して参加しました。もともと県は、「改修+増築」で出来ると、2005年・2006年に調査と計画をしてこられました。大学法人側は2006年以降新築を望む先生方の先導で「全面改築」でなければ解決しないと主張されています。

私は当初の県の考えを支持します。県の学事振興課が検討した予算としてはおおよそ、改修+増築ならば140億円。それに対しての法人側全面改築案であると280億円になっており、二倍の金額です。改修の技術的な工夫は力量によって充分克服可能です。「全面改築ではなく、改修と増築でやりましょう」という意見は、検討会の中ではたしかに少数意見であります。検討会の人員構成そのものが、「全面改築」を主張してきた先生方で大半を占め、改修を主張する人が少数意見になるように、はじめから用意されているので多数・少数の問題を超越して論議すべき場面です。今回俎上に上がっているのは「新音楽学部棟の新築」だけのように見えますが、実はこれを建てるということは、将来、新コンサートホールを隣接して新築することになり、既存のそれぞれの建物をドミノ式にスクラップアンドビルドしていくことと組み合わせっており、自然破壊につながる全面改築に及ぶ計画であることは、賢い人が見れば一目瞭然です。これからゆっくり全体計画を検討する、と言いながら、新音楽学部棟そして何故か新講義棟・新学生会館も、と次々の計画が出てくることの意味が理解できません。とりあえずの緊急対応のみとしてしか考えず、どうしてこの段階で「全体計画」を検討しないのか、全く理解に苦しみます。

第 5 回の検討会では、「外人公舎と女子寮(及び職員公舎と職員住宅はいずれも 2010 年 3 月末日に法人から県に返還されて県の所有になっている、と説明されているもの)の取り壊しが県議会で予算化しているので実行してよろしいと了承されたものと思います」という報告がなされています。これは「報告事項」であって「検討事項」になっていません。従って了承する、しないという問題ではない。かねてより、この問題は全体計画に関わる重要な事項でありますから「検討」していただきたいと要望して参りました。「報告」ではなく「検討」していただきたいと重ねて要望します。了承はしておりません。

そこで知事に申し上げたい。本当に愛知芸大の将来を考えているのは、誰でしょうか。少子化と厳しい経済の中で、入学希望者が減少していることは事実です。新しい建物をどんどん建てて、更に保守管理費が増大し、学校経営が大変になる方向がわかっているながらスクラップアンドビルドをやり続けてよいとお考えでしょうか。自然保護について並々ならぬ努力の先頭に立っておられる神田知事が、秋に名古屋で開かれる COP10 において、スクラップ中の外人公舎と女子寮がある愛知芸大三ヶ峯の丘を、世界から来る自然保護関係の方達に見せなければならぬ事態をどうお考えですか。

愛知芸大を大切に考えて作られた桑原知事の残された意思と、1966 年開校の時の設計者の思い、そしてここをルーツとしてきた多くの卒業生の思いを、神田知事に受け継いでいただきたくて、この手紙をお届けします。外人公舎と女子寮は今まさに取り壊しが実行されようとしています。学内にもこの二つの愛すべき建物を利用したいという意見があるのに、それが県に伝わっていないと聞いています。是非、今回の取り壊しを中止していただきたいと切望します。愛知芸大全体を、壊さずに、明らかに安く出来る方法で直して使う、という方向を指示していただきたいと希望します。

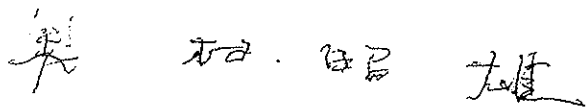
皆さんが苦勞して納めた県民の税金を、何故安く出来る方法がいろいろあるのに、敢えて高くなる方法で使っているのか、世に問いたいと思います。

お返事を聞かせてください。よろしく願いいたします。

2010 年 9 月 9 日

東京芸術大学名誉教授

奥村 昭雄

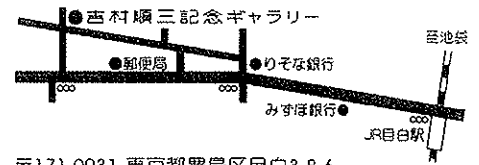


# 吉村順三記念ギャラリー

JUNZO YOSHIMURA Memorial Gallery

## 御蔵山の家

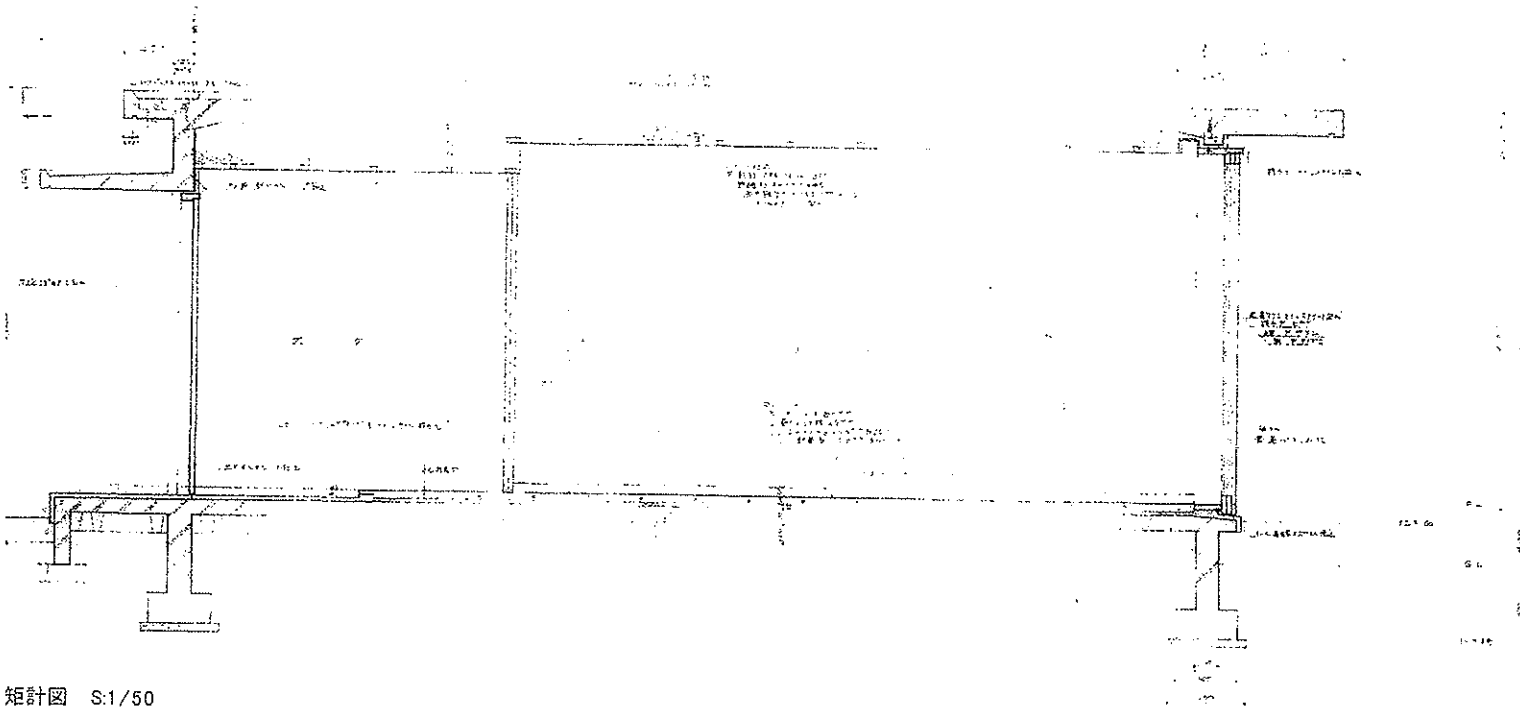
展示期間：2010年6月26日(土)より8月1日(日)までの  
各土曜日と日曜日の 13:00~18:00



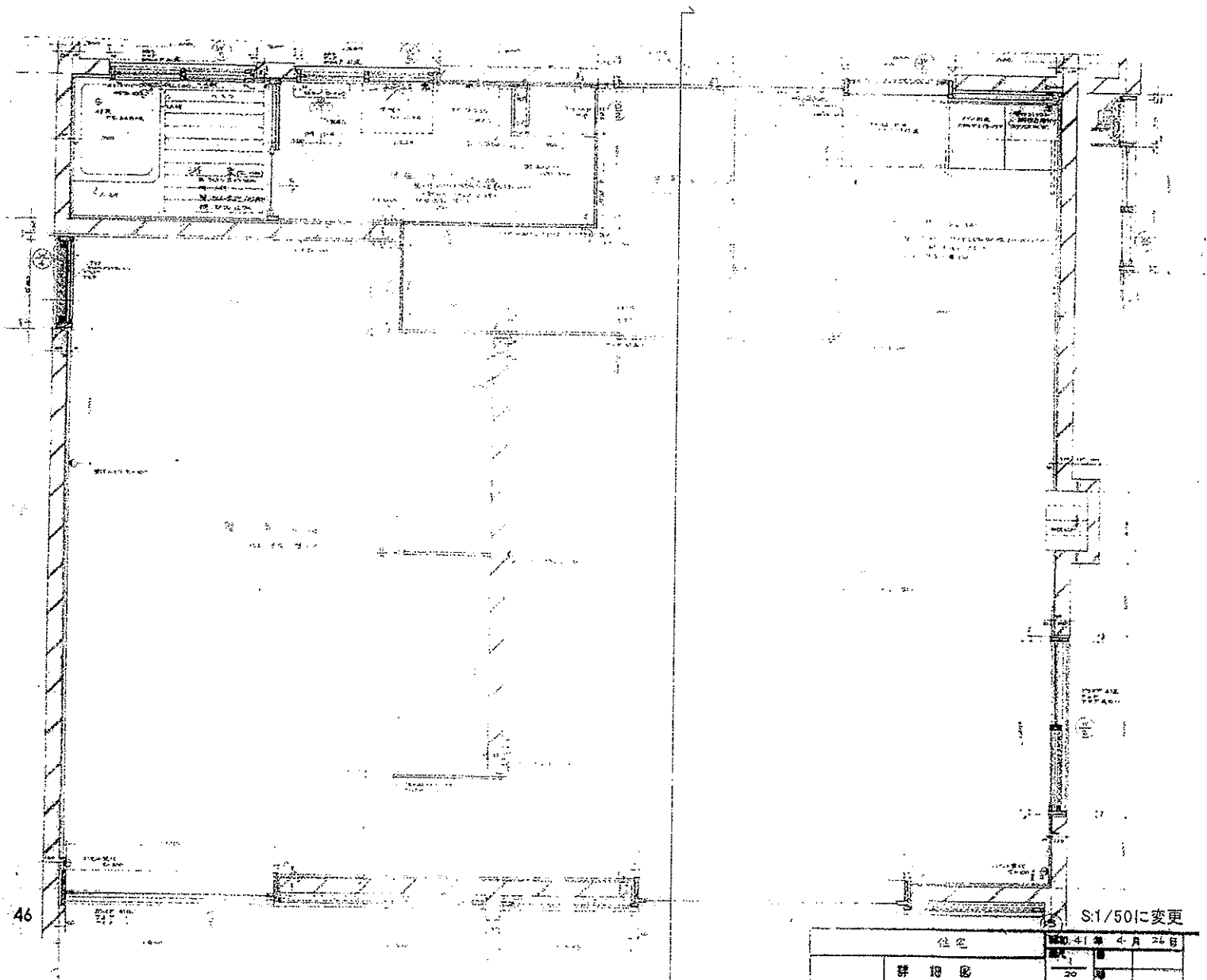
〒171-0031 東京都豊島区目白3-8-6

小さい・安い・暮らしやすい、の三位一体の家。RCの平屋で53.5㎡(16.18坪)。設計は多分1964年から始まって2年以上かけ、その間に担当者が4人、交代した。その間、平面は17種類、東西スパンは11種、南北は8種やった。木造も1ヶあった。なぜそんなに種類があったのか。それは吉村が、いろいろ、よく、考えたということ。原寸図をどんなにたくさん書いたことか。展開図も良く見てほしい。この家のディテールは今、消えるかもしれないと言われている愛知芸大の教員住宅に生きている。次に、この家がどのようにして成長したかということ。石井修さんが、あとを引き継いでくださり、2度の増築をして現在の姿(この頁の写真)になっている。今、住んでおられる方の家族の成長に従って自然な増築が、姿も機能も良く行われ、現在に至っている。「子供たちが独立したので、さあ、減築して、元の形にしようかしら。」と両親がおっしゃっているという。建物の一生、ということがここに実際の形で生きている。(文責 奥村まこと)





矩計図 S:1/50



位置		昭和41年4月24日	
群	図	20	第